橋の遺伝子 ⑥

大阪仕込み 韓国で力試し

「全長18キロ」で技術指導

韓国の仁川（インチョン）国際空港に、韓国最長の巨大な橋の建設が進んでいる。対岸にある松島（ソンド）新都市を結ぶ橋の全長は18キロメートル余り。10月に完成すると、世界でも7番目の長さになる。

韓国を代表する企業のサムスン物産が仕切る巨大プロジェクト。このリーダーを1人の日本人技術者が務めている。サムスン物産常務の田中洋さん（60）。仁川大橋の中心部に架かる斜張橋の設計・建設などの責任を負う。橋げたを支えるケーブルが伸びる主塔の高さは60階建てのビルに相当する。「世界有数の巨大構造物が日を追うごとにできていく。その現場にいる興奮はなかなか味わえない」

仁川大橋は実は、大阪港に架かる此花大橋や明石海峡大橋といった関西で培った技術が生かされている。「橋梁（きょうりょう）建設の本場、大阪で育った」と話す田中さんは日立造船で、これらの橋の設計・建設に携わった。

日本にない意欲

田中さんに転機が訪れたのは2005年。大阪・梅田のヒルトンホテルに呼び出され、サムスン物産幹部から日本語で切り出された。「仁川大橋で技術指導をしてほしい」

サムスン物産は此花大橋と似たタイプの橋を韓国で建設するため、技術陣が大阪市を何回か訪れたことがある。そのとき応対したのが田中さん。明石大橋では風による振動を抑える手法を考え、土木学会賞を受賞した。こうした経緯から、田中さんをヘッドハントしようと考えていた。

当時、公共工事の縮小で橋梁会社はリストラを余儀なくされていた。田中さんは新規事業関連の営業部長になり、橋の仕事から遠ざかっていた。提示された待遇は驚くほどよかったものの、韓国での生活や家族のことを思うと迷った。

そんなとき、日立造船が管理職定年を設定した。その年齢に達した田中さんは移籍を決めた。「もう一度、自分の実力を試そう」

「お前、逃げるのか」。親しい役員から厳しい言葉が飛んだ。しかし、現場に来ると吹っ切れた。米国や英国のほかドイツやロシアからも来ている。この多様さは日本ではありえない。

何よりも韓国人技術者の熱心さに感じ入った。技術の吸収が早く、英語はもちろん日本語も堪能だ。「おい越そうという意欲にあふれている。「この貪欲（どんよく）さは日本の現場にはもうない」

「視野が開けた」

もっと驚いたのがビジネス戦略だ。日本で同じ規模の橋を建設するには10年かかる。サムスン物産は他の橋で使った設計手法や部材を流用することで、4年半で完成させる。こうした経験を海外展開に生かし、エレクトロニクスに並ぶ輸出産業に育てる狙いだ。「韓国に来て視野が開けた」と田中さんは話す。

対する日本。官需という限られたパイを談合で分け合い生き延びてきた業界には、世界を見据えて競争力を高める意識はほとんどなかった。

不安はある。サムスン物産には神戸製鋼所などから13人の日本人技術者が移ってきたが、不況色が強まったこの1年間で数人が去った。来年3月以後も契約できるかは「評価次第」。そのときはコンサルティング会社を作り、海外の別の現場に行けばよいと田中さんは考えている。「技術があれば、定年なしに働き続けられる」。以前よりもたくましくなった気がする。

「もっと腕をふるいたい」。ユニークな橋を数多く抱える関西には、こんな思いを持つ技術者は多い。実際、長大橋を築くことで、性能や耐久性などで世界有数の技術も蓄積された。しかし、そうした技術や技能を生かす場は国内にはほとんどない。腕に覚えのある技術者は社会インフラの整備が急ピッチで進むアジアを目指す。

橋は西から東へ進む――。橋の革新は九州や関西で起こり関東に広まったことから、国内ではこう言われてきた。その流れはアジアへ向かう「西向き」に変わった。また元に戻す力は今の日本にあるのだろうか。

（編集委員　青木慎一）

韓国へ移った田中洋さんは「自分の腕を試そう」と思った（仁川大橋の建設現場）

「次世代育て」技術者OB立つ

橋梁技術者を目指す若者が減っている。大学の工学部の志願者が減る中で、土木系の人気はかなり低い。そんな現状を打破しようと技術者OBが立ち上がった。

「おー」「崩れない」。石こう製のブロックを積み上げた小さなアーチ橋に足を乗せると、子供たちから感嘆の声が漏れる。8月8、9日、神戸市の「土木の学校」が開かれ、市内の小中学生とその親、約80人が参加した。この日は厚紙でアーチ橋の型紙を製作、石こうを流し込んでブロックを作り、アーチ状に並べた。

「アーチって丈夫だよね」。神戸市に住む田中輝彦さん（69）は子供たちに声をかける。土木の学校が始まった6年前から、田中さんはプログラムの企画を担当してきた。「子供の理科離れが指摘されるが、土木離れはより深刻だ」

田中さんは大手ゼネコンの鹿島でダムや橋の設計・施工を担当した。土木への関心の薄さから、子供向けのわかりやすい授業の必要性を感じ、プログラムを開発。出前授業などにも取り組んできた。今では高校生にも教える。「実験から入ると土木技術は楽しいものだ」と言う。

田中さんとともに指導に当たる一人が茂岡一政さん（69）。大阪府でモノレール高架橋などの建設に携わってきた。関西の土木技術者OBらでつくる「シビル・ベテランズ&ボランティアズ（CVV）」のメンバーだ。22日には大阪市立総合生涯学習センターで、割りばしを使った橋作り教室を開く。「どれだけ役に立つかはわからないが、一人でも多く土木の楽しさを知ってもらえれば」と語る。

CVVは土木学会関西支部の支援を得て、10年前からこうした活動に取り組んでいる。「こんな貢献もあるのか」と感じるメンバーが多いという。CVV元事務局長で大阪市OBの金山正吾さん（74）は「授業で子供たちは生き生きしている。談合の悪いイメージを少しでも取り除きたい」と話す。

石こう製アーチ橋の作り方を子供に教える茂岡一政さん